

吉田東伍 歴史地理学者。独学で「大日本地名辞書」を刊行、能楽や宴曲でも偉大な業績をあげ、学内抗争で疲労死。
よしだとうご
禁門の変・1864 = 越後国蒲原郡保田村で、名家旗野木七の三男に生まれる。

明治維新・1868 = 4歳：

明治6年政变 1873 = 9歳：

_小学校卒業後、新潟英語学校・新潟学校中等部に進んだが、

西南戦争・1877 = 13歳：_退学し、

_以後、農業・戸長役場・郵便局という家業に従事しながら、家の蔵書を読みふけて独習、

明治14年政变1881 = 17歳：_早くも「安田史料」を起稿して、のち新潟県に進呈。

新体詩抄・1882 = 18歳：

岩倉具視没・1883 = 19歳：_新潟県第二種小学校教員試験に合格し、中蒲原郡の小学校教員となり、

秩父事件・1884 = 20歳：_新潟師範部・中等部に入るも直ぐに退学、蒲原郡大鹿新田(新津市)の吉田家の養子となる。

内閣発足・1885 = 21歳：_志願して1年間仙台兵営に入り、その間、休暇を利用して図書館に通う。

国民之友始・1887 = 23歳：_高等小学校教員の検定を得て、北蒲原郡の小学校高等科で再び教壇に立つが、

初の対等条約1888 = 24歳：_那珂通世の「年代考」を読んで、史学のとりことなる一方、実業で身を立てようと、

帝国憲法発布1889 = 25歳：_退職し、北海道に渡り、歴史地理の研究に没頭、

帝国議会始・1890 = 26歳：実業は失敗して帰郷するが、北海道から(史学雑誌)に「古代半島興廢概考」を寄稿して学者の注意を引き、足尾鉱毒始・1891 = 27歳：*上京して遠縁の市島謙吉宅に寄寓、市島が(読売新聞)の主筆だったことから、以後、落後生という筆名で

続々史論を発表し、田口卯吉から好敵手とみなされ、

都司千島探検1893 = 29歳：_「日韓古史断」、

日清戦争始・1894 = 30歳：*「徳川政教考」で学者としての地位を確立した。

日清戦争終・1895 = 31歳：_記者として<日清戦争>に従軍。この頃から、日本の地名の変遷を記した研究がないことに気付き、「大日本地名辞書」の編纂に着手。

ピアノ国産化・1900 = 36歳：「海の歴史」刊行。_「大日本地名辞書」の刊行開始。

田中正造直訴1901 = 37歳：_喜田貞吉の推薦で、東京専門学校文学部史学科の専任講師(教授職)となり、教科書疑獄・1902 = 38歳：早稲田大学と改称後も、そのまま担当、

以後、東洋史主任として、西洋史の浮田和民とともに、早稲田史学の基礎づくりに邁進、

日露戦争終・1905 = 41歳：

韓国反日暴動1907 = 43歳：*独立で多くの困難と闘いながら13年かかって「大日本地名辞書」11冊を完成した。原稿の厚さ5cmに及ぶ質量とも古今未有の大地図で、今日でも刊行されている。歴史地理学のほか日本音楽史にも精通し、とくに能楽の造詣が深く、

アラギ創刊・1908 = 44歳：_「(世子六十以後)申楽談儀」を校訂、これが世阿弥伝書の発見につながる契機となった。

伊藤博文暗殺1909 = 45歳：_「大日本地名辞書」で文学博士。自ら「花伝書」と命名した「風姿花伝」をはじめ、当時発見された世阿弥の著書16部を収めた「世阿弥十六部集」を校注、「吉田本」と呼ばれる。これは従来の観阿弥・世阿弥像を一新させ、近代能楽研究の出発点となった。ついで「禅竹集」を公刊。

韓国併合・1910 = 46歳：「維新史八講」「利根治水考」。

大逆事件判決1911 = 47歳：_早大に教授職が設置されるとともに教授となる。

明治天皇没・1912 = 48歳：

大正政変・1913 = 49歳：_「倒叙日本史」(逆さ日本史をすでに試みている)。

_晩年は宴曲(早歌)研究に努め、東儀鉄笛の協力で宴曲再興を試みながら、

民本主義・1916 = 52歳：_日本莊園史研究の金字塔ともいべき「庄園制度之大要」を刊行、

ロシア革命・1917 = 53歳：_私財を投じて「宴曲全集」を公刊して研究の基礎を築いた。早稲田大学の理事を兼ねたが、学内の抗争<早稻田騒動>に巻き込まれ、

本格政党内閣1918 = 54歳：_その疲労のため、尿毒症で没した。